

ふるさと研究発表会

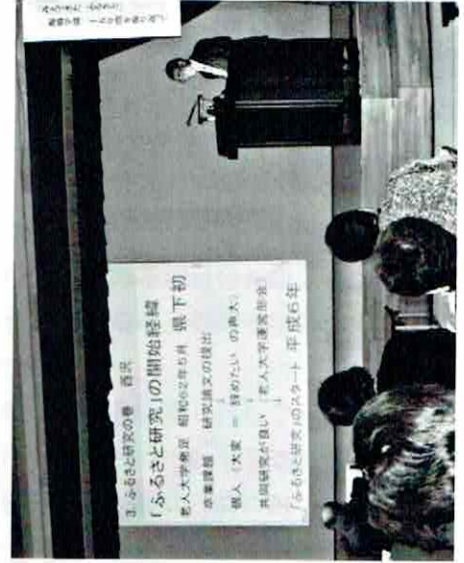


●とき 平成25年11月12日(火)
午前9時30分～11時30分

●ところ 湖西市老人福祉センター集会室

《研究発表会次第》

1. 開 会
2. 学長あいさつ
3. 来賓あいさつ
4. 研究発表
「みえてきたふるさと」
—海鳴学園 25 年間を振り返って—
5. 指導講評
6. 閉 会



みえてきたふるさと

「海鳴学園25年間を振り返って」

はじめに

私たちの研究は、生涯大学「海鳴学園」の「海鳴って、なんだろう?」「どのような謂れがあるのだろうか?」こんな疑問から始まりました。

当時編集委員であった寺本氏に聞きました。新居の人なら誰でも聞いている「うみなり」大学生だから音読みで「かいいい」に、当時の課長定田一氏が決めたそうです。

遠州の七不思議の一つに、遠州灘の海鳴りがあることは知っています。そしていくつかの伝説が生まれています。「浪小僧」「海坊主」「軽業師」「弘法大師の薬人形」「行基菩薩の薬人形」などです。波の音の伝説はどれをとってみても、「浪小僧が助けられた恩返しに天気を知らせる」というようです。

今では、騒音が多くて町中では、あまり聞こえなくなりましたが、天気の良い時には物静かに、しけで海の荒れる時には荒々しく、浜の方から波の音が聞こえてきます。北遠の山の人たちにも聞こえるそうです。

そこで私たちは、テーマを「みえてきたふるさと」―海鳴学園二十五年間を振り返って―としました。

昭和六十二年五月七日、県下初の「老人大学」が新居町にスタ

交流を深めるため福島に出向いた時、話の中に県立の老人大学があり、卒業生は大学院まで進むと聞きました。カリキュラムは立派な内容が組まれていました。新居町でもこれを参考にして、老人大学を設立することになりました。昭和六十二年に静岡県県下初の老人大学が八十名で開校されました。そのうち、明治生れの方が二十名おられました。最年長は、八十歳の方です。平成六年、生涯大学「海鳴学園」と改め、今に続いています。

開校にあたり、渡辺町長の話の中に「高齢化社会になるにあたり、単に長生きして良かったとか、保護や援助と言った後ろ向き」の制度を考えるのではなく、豊富な人生経験や知識、技術を活かし、社会に参加し、貢献できる一員に成るべく、老いて益々張りのある人生を送り、仲間と学び、社会との関わりの中で生きることの大切さを学ぶ機会として海鳴学園を開校した」とありました。誕生にまつわる一つのエピソードをご紹介します。

「私は、当時大型運転免許を持っていました。昭和五十四年、新居の役場より依頼がありましたので、木曾福島町への交流バスを運転して行きました。

五十四年に木曾福島町と交流し、親善友好都市提携を結び、その後、老人会・婦人会・商工会などのグループの交流が盛んになったようです。

福島からは、産業まつり「あらいじゃん」と、小学生は新居弁天海水浴場へ、新居からは、木曾福島スキー場へと交流が今も続いています。

今思えば、私は、生涯大学の構想のもととなる第一歩の運転手であったと、不思議な縁を感じます。」

トして四半世紀が過ぎました。私たち二十五回生は、新居町が湖西市と合併した(平成二十二年三月二十三日)翌年に入学しました、旧市内の大学生が十四名入り、半々になりました。このような節目の年に学んだ私たちなので、ここで一度立ち止まって先輩の方々が積み上げてこられた「海鳴学園」について初心に戻ってまとめてみたいと考えました。

そして、そのことを私たちだけでなく、先輩や後輩、広く湖西市全体にお知らせしていくことが、高齢者の生きがいにもつながると考え、取り組むことにしました。

一．誕生の巻

昭和四十三年頃、高齢者の教育が必要ということで明治学級が始まり、百五十名程の応募があったそうです。そして、昭和四十五年に町民センターができ、各種クラブ等のグループが活動しました。婦人学級、青年学級、成人学級などいろいろです。例えば、新居町内の店を廻り、肉を百グラムずつ買って、目方を計り直したり、品質を調査したりしました。



昭和五十四年に町制九十周年の記念事業として、長野県の本曾福島町と同じ関所の町同士、山の関所と海の関所として姉妹提携を結び、お互いの良いものを取り入れることにしました。

二．講座の巻

昭和六十二年正式に老人大学第一回生が入学、そして私たち、二十五回生が卒業する平成二十五年までの二十七年間、すばらしい授業が行われていたことに敬服しました。

これらの講座から「みえてきたふるさと」を知りたいと思い、三期に分けて調べてみました。

前期 昭和六十二年度から平成五年度までの七年間
老人大学であった時期です。

県下初の老人大学のスタートに際し、大学教授、静岡県サードセンター所長、医療センター副所長、新聞社報道部長など講師陣から関係された方々の力の入れ方が読み取れます。

中期 平成六年度から平成十五年度までの十年間
生涯大学「海鳴学園」と名称も新しくなり、大学院が加わり三年間の学びとなりました。

後期 平成十六年度から平成二十五年までの十年間
新居町が湖西市に合併し、施設見学も広域になりました。

行政、生活、歴史、健康、教養、学校訪問の六つです。

このほかにクラブ活動、修学旅行が加わりました。

(一) 行政

円グラフからお分かりいただけるように、前期は行政に関係した講座が、とても少ないです。

実は、講座とは別に町長の町政方針を皮切りに、毎回、各課の課長が一時間、仕事の内容、予算などの説明をしてくださいました。

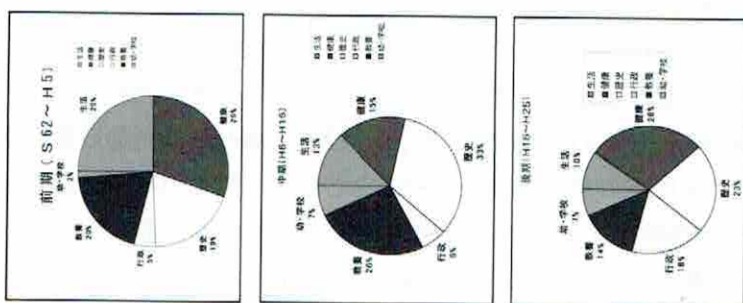
老人大学が「まず、町の行政を知ってもらうことから始まった」というにふさわしい力の入れようでした。「居ながらにして町の詳しいことを知る事ができた」と受講生には好評でした。

「生涯大学」と名前を変更してからの中期には、講座のみとなり、町長による町政案内と各担当課の職員による公開講座の二つになりました。

高齢化の美態と福祉政策、関所周辺の町づくり等です。

後期には、公共施設見学が始まり、講座数は増えました。「浜名湖競艇場」「新居図書館」「リュミエール新居」等、湖西市との合併後は、「アメニティプラザ」「地域職業訓練センター」等が加わりました。

見学することによって、家庭排水を今まで以上に気をつけるようになる等、行政のいろいろなことを知ることで、私たちの市政に対する意識が高まりました。



競艇場に初めて出向いた体験発表を紹介しします。

「施設見学の一つに競艇場が入っています。

案内された四階の来賓室は浜名湖が一望でき、舟の疾走もよく見える素敵な席です。私は、九州の田舎育ちで初めてのことで興

齢者を多数集めて高額な商品売りつける催眠商法なるものが多発し、問題になった時期です。

後期始めには、「携帯電話入門」の講座がありました。携帯電話は誰もが持つ時代になり、犯罪も増えています。現在は、身近な犯罪に対する講座はなくなりましたが、必要ではないかと思ひます。



現在は、「家庭でできる救急法」「交通教室」の講座があります。

救急法では、マネキンを使っての人口呼吸のやり方、AEDの使い方、救急車の呼び方などを学びました。

「交通教室」は、車社会の今日に欠くことができません。夜間外出によるお年寄りの事故が多いと聞きました。反射材を着用するよう心がけたいものです。

時代の変化によって講座の内容も変わってきています。

III 歴史

前期は、街道と関所から始まり、ふるさと再発見、新居町史を学びました。

中期には、全体の講座の中で歴史が最も多いのに気づきました。「よみがえる古代」「頼朝伝説」「災害の歴史」「発掘からみた郷土」「我が町新居の変革」「旅籠紀伊国屋」「小松楼」等、内容が興味深いものでした。

後期は、新居町内にとどまらず、合併に伴って「豊田佐吉記念館」「おんやど白須賀」「本興寺」等、湖西の歴史、浜名湖の周辺の寺

味津々でした。

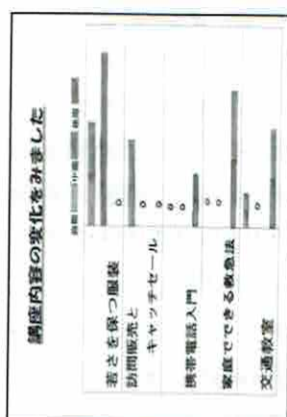
舟券の買い方、レース表の見方などいろいろと親切に、きれいなガイドさんが説明してくれました。

賭け事はしない私でしたが、今日は一つ社会勉強のつもりで舟券を買うことにしました。レース表とにらめっこしながら、あれこれと考えての購入です。これは、ちよつとボケ防止になるかなと思います。

どんなことでも考えると少しは頭の体操になり、プラスになり嬉しかったです。お金のありがたさを身にしみて感じました。おいしいお弁当も出してもらい、とても楽しい半日を仲間と過ごさせてもらいました。」

II 生活

生活の面で講座の変化を三期に分けて調べました。



たくさんの項目の中から五つを選んでグラフに示しました。

前期から中期には、「若さを保つ服装」という講座があり、卒業するまでの三年間に一度は受けていたようです。

皆さんの文集によると、時には若い娘さんによるファッションショーも開催されたとありました。さぞ楽しんだことでしょう。また、これは女性中心の講義になっており、男性の服装についても

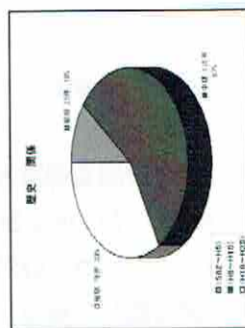
話して欲しかったと記されていました。

また、「訪問販売とキャッチセールス」という講座があり、高

院やお宮について学びました。

新居町には、十二の寺院があります。それも大体の寺院が山沿に建てられています。番地も地名もとんでいます。不思議でしたが、そんな疑問が解明されました。

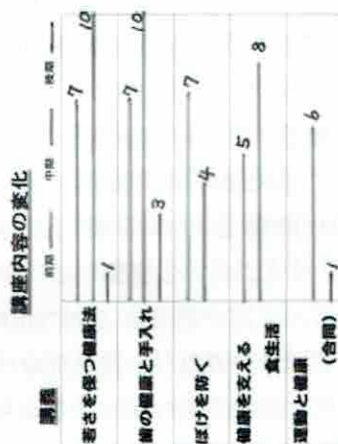
日本で唯一現存する関所の建物や偉大な発明王「豊田佐吉」等、湖西の宝を大切に受け継いでいこうと思ひました。



IV 健康

健康をテーマにした講座を調べました。「若さを保つ健康法」「歯の健康と手入れ」「ボケを防ぐー脳外科医の立場からー」「健康を支える食生活」この四つのテーマは前期から中期まで通して続いていました。

中でも「ボケを防ぐ」については医療センター副院長の金子先



生を迎えて講義を受けています。その話の中で次の五か条を教えてくださいました。

- ア. 仲間がいて気持ちの若い人
- イ. 人の世話をよくし、感謝のできる人
- ウ. 本を読み、よく書く人
- エ. よく笑い、感動を忘れない人
- オ. 趣味の楽しみを持ち、旅

の好きな人

この五箇条を心掛けて、生涯現役を目指したいものです。

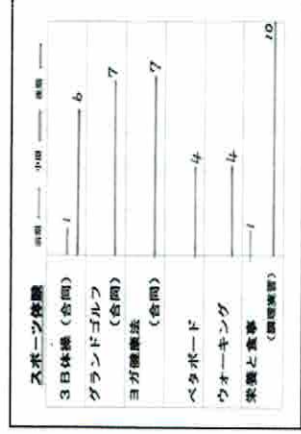
次は、スポーツ体験です。前期、中期は、講座の中にはなく、午後のクラブ活動の中でいろいろなスポーツを楽しんでいたようです。

後期からは三学年合同で「3B体操」「グランドゴルフ」「ヨガ健康法」等を行いました。

後期から調理実習が始まりました。

私たちの時は、男性の方もエプロンをつけて慣れない手で野菜を切っていました。試食会ではいろいろな感想が飛びかつてとてもにぎやかでした。

この経験を活かして男性の方も自宅の台所に立つていただけると嬉しく思います。



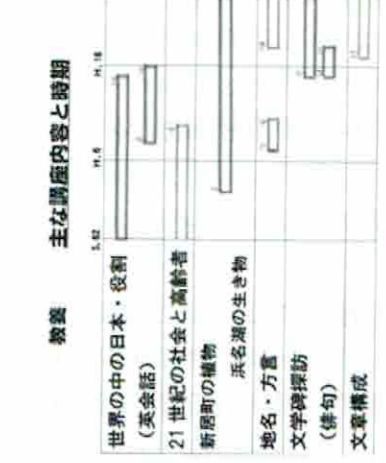
田 教養

教養関係の主な内容を三期からみたグラフからわかるように、前期から中期までの十六年間も「世界の中の日本の役割」等国際社会を見据えた講座が続いていたことは驚くべきことです。さらに、中期には、英会話が八年間続いていた。文集に「英会話が楽しかった」とあったので、インタビュアーのおり、訊いてみました。「ハクハクして困った」と答えた人が多く、妙に納得してしまいました。

町の総合計画に「国際感覚を身につけた町民の育成」が掲げられ、

平成十年に、オーストラリアのジェラルトン市と姉妹提携を結び、交流が盛んだったことがわかりました。合併後も続いています。

なお、現在まで一番長く二十三年間続いているのは、「新居町の植物・生き物」の講座です。下の写真は「多羅葉」という木の葉ですが、字が書けるのでハガキ。切手を貼れば出せるそうです。お縫を書いたので「お縫葉」とも言われます。また、牡蠣や海亀の卵の生態などの話を楽しく聞き、自然豊かな「ふるさと」を再発見、後世に伝え残していこうと思いました。



後期には、文学碑探訪が始まりました。十基以上あるようで歴史と文化の町が見えてきました。「何気なく碑の前を通っていたけど、授業のお陰で関心を持つようになった」とインタビュアーにもありました。今後は、湖西全域の文学碑巡りをしたいです。

なお、俳句講座が二年間のみありましたが、成果は「卒業後の活動の巻」に載せてあります。

内 学校訪問

学校との関わりの中で、幼稚園、小学校、中学校などの訪問について表にあらわしてみました。幼稚園、小学校ともに二十一年間という長い歴史となりました。現在も続いています。

また、大学院生が、平成十年より中学校を訪問し、八年間続きました。その後、保育園へと訪問先が変わりました。

訪問授業は、子どもたちの喜ぶ顔を見たくて、毎年のことですが、楽しい訪問になるように工夫しました。



昨年の小学校訪問では、紙芝居をやりました。題材は、大昔、浜名湖を襲った大津波によって、流された神社のお話です。子どもたちの表情は真剣そのものでした。

この後、クラスに子どもが分かれて、各々、昔

年度別の学校等の訪問状況

年度	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
保育園															
幼稚園															
小学校															
中学校															
保育園															
幼稚園															
小学校															
中学校															

の遊び、「コマ」「紙でつぼろ」「お手玉」等で交流しました。

教頭先生のお話の中で「この学校は、地域の人たちやボランティアの方々、子どもたちと接して下さって幸せです」と言われました。

今後も、地域の先輩と子どもの和やかなふれあい授業が益々発展することを願っています。

内 クラブ活動

前期は、開校当初に、「けん玉」「大正琴」「レコード鑑賞」など珍しいクラブ活動があり、その後、「盆栽」「映画会」「社交ダンス」等行われていました。

中期は、「社交ダンス」や「書道」「水墨画」「カラオケ」「ビリヤード」等が行われ、卒業後も同好会のように続いていたようです。

後期は、「陶芸」「ペタボード」「輪投げ」「絞り染め」「二閑張り」「グランドゴルフ」等その年度の活動になり、いろいろな体験をしています。

クラブの一部を写真で紹介します。

「社交ダンス」

ブルース、タンゴ、背筋をピンと伸ばし楽しそうに踊っています。

卒業生の方もご夫婦でダンスを楽しんでいる方は「海鳴のおかげですよ」と話されていました。

クラブ活動は、講座とは違い、楽しさ、和やかさがあります。また、老後の趣味として生き生きと楽しんでいる方が多くいます。



Ⅵ 館外研修と修学旅行

館外研修は、一年と二年が、日帰りバスを利用します。美術館や名所旧跡が主です。私たちの時は、名古屋方面で「徳川美術館」「文化みち」でした。さすが名古屋の城下町だと感心しました。

大学院生は、一泊です。旅は「非日常」のことです。コンディションの良い身体をもつことが不可欠です。また、旅は三度楽しめます。プランを楽しみ、旅そのものを堪能して、帰ってから思い出を好きな形で残す。生涯の思い出となります。

今まで二十一年間の、行き先を調べると関西方面七回、富士方面六回、中部圏四回、関東方面一回、四国と遠いところもありました。旅とか研修は、知らない土地を歩き、知らない人々に出会い、知らないものを見ることが、自分の精神と肉体を活性化し、生きる刺激を与えてくれると言われます。

私たちの先輩の中には、学童疎開、学徒勤労令などで修学旅行などできなかった方もいると思います。生涯大学での館外研修や修学旅行は大変楽しかったと推察されます。

Ⅲ ふるさと研究の巻

県下初の「老人大学」がスタートしたのは昭和六十二年五月からです。

この大学の卒業課題は、研究論文の提出で、原稿用紙四百字語一枚以上です。

これは個人に課せられたもので重圧は大変なものでした。

課題をやめて欲しいとの声が大きくなり、町の「老人大学運営部会」で審議された結果、グループによる共同研究に変更すると

明し、スライドはとても苦勞されたそうです。

それでも、「家では家族との会話が增え、孫が来た時、関所や紀伊国屋を案内できてうれしかった」とか、お孫さんが夏休みの宿題でおばあちゃんから聞いたことや資料をまとめて発表して「優秀賞をもらってねえ」と笑顔で話されました。

若さのヒケツは、仲間でしょうか？

Ⅰ 平成十三年度卒業生へのインタビュー

平成十六年度の研究のうち二つを紹介します。

一つめは、過去十年間のふるさと研究で、「歴史・行事」については、出尽くしたのではないかとテーマ選びにいろいろ悩んだ末、最近問題になっていることからテーマを選ぶことにしました。

浜名湖のアサリの漁獲量が減り、平成十五年より、潮干狩りが中止されました。その結果、観光客が減り、大きな損失を受けていることを知り、「なぜ、アサリが消えたのか？」を研究しました。

その結果、アサリの天敵ツメタ貝の繁殖が原因だと分かりました。源太山の公民館の屋根にはツメタ貝がいっぱいありました。なんとカラスが運んできたようです。漁協ではツメタ貝を駆除するためいろいろな取り組みがされました。その一つに、ツメタ貝の調理法を研究し、商品化に取り組みました。そこで班でも調理してみました。臭い、ともかくひどい臭いが台所中に広がって、大変だったそうです。それでもなんとか佃煮にして、当日、皆様に食べていただいたそうです。

二つめは、「お釈迦様と涅槃団子について」です。

二月十五日は、お釈迦様の命日です。命日には、新居の十二の寺で涅槃図を掛け、法要が行われます。お供物として各お寺でそ

うことでふるさと研究のスタートとなりました。

ふるさと研究が始められたのは、平成六年の生涯大学の時からです。十一月十六日に実施。

金原講師のご指導で、「大学院だから研究論文をまとめて「研究紀要」として残すべし、のとおりに、文集「海鳴」にふるさと研究の要旨が掲載されるようになりました。

今回の研究対象は、六十一件と膨大な数でしたが、その内容を詳細に教えて貰おうと先輩へのインタビューをしました。

Ⅱ 平成十三年度卒業生へのインタビュー

平成十三年度の方は、二十六人が四班に分かれ、研究されました。

一班は、遠州新居宿「紀伊国屋」と旅籠

二班は、新居郵便局の移り変わり

三班は、今切渡船の発祥と沿革

四班は、湊神社について です。

最初は、どのように進めたらいいのかわからないので図書館へもよく行き、職員の大石さんに教えてもらったり、金原先生に聞きに行ったり、現地へも、何度も足を運んだそうです。

江戸時代、舞阪と新居の間は、船で二時間もかかりました。

「ここを押さえておけば大丈夫」と家康がつくった新居の関所。それを担う今切渡船。昔の新居の様子がよくわかるようになりました。

終わってから、片山町長の時でしたが、ぜひ関所案内人になって欲しいと頼まれたそうです。

研究発表は、今のようにパソコンが使えず、模造紙に書いて説

れぞれ涅槃団子を作ります。そこで班でも作ってみました。硬すぎたり、軟らかすぎたり、なかなか思うようにならず苦心されたそうです。

研究のテーマを選ぶ時は、少し角度や視点を変えてみることで、面白い研究ができるかも知れません。

私たちは、全部で十二回インタビューをしました。

インタビューの終わりに「心に残っていることは何か？」と伺ったら、どの学年の方ももれなく「ふるさと研究のことだよ」と言われました。

それは、「いつも仲間と一緒に考えたり、調べに行ったり、発表したりしたから。今でも、こうして集まって、楽しくおしゃべりしてられる。」と話してくれました。

卒業してからも楽しく集まれることは、大きな業績といえるかも知れません。

Ⅲ ふるさと研究

「ふるさと研究」というのは、大学院生になったら、一・二年の講座で学んだことをヒントに「ふるさとのことをもっと知りたい」という願いを持ち、テーマを決めて、仲間と力を合わせて自主的に調べる活動です。

先輩の研究が、毎年発行される文集「海鳴」の中にまとめられています。



この中の二・三を紹介します。

ア. 平成六年度大学院一回生がまず始めに取り掛かった研究が、橋本にある「紅葉寺探案」です。この寺跡を研究し、昔、源頼朝が上洛のうちに、橋本の長者の娘を寵愛し、その方は頼朝の死後は出家されて妙相(みようそう)と名乗られ、この橋本に紅葉寺を建立してもらったという頼朝伝説について明らかにしてくれました。紅葉寺へ足を運ぶと鎌倉時代を偲べます。

イ. 平成十一年度の大学院生は、新居の灯籠の多さに疑問を持ち、調べたところ、昔、新居は火災が多くて、これを何とかするために、々は秋葉山信仰と結びついていたということがわかったそうです。

ウ. 一方 三・一の東日本大震災を目のあたりにした二十三回生は、タイムリーに「大地震と大津波の研究」をし、新居町に起きた津波被害をひもとき、自分たちは、地域で何をしたらよいか研究したのです。

このように先輩の研究をのぞいてみると、たくさんの「ふるさと」がみえてきます。

最後のページに「ふるさと研究発表一覧」として六十一件すべての研究テーマと要旨を整理してまとめてあります。

四. 卒業後の活動の巻

(一) 学年ごとのつながり

海鳴学園の三年間いろいろの教科課程を学び、仲間作りの中で

表をしています。

(二) たてのつながり

七回生より、各グループの名前をつけてカラオケ、リズム体操、踊り、食事会、旅行等いろいろな活動をしています。

平成十一年度卒業の十一回生は、「たつの会」といい、辰年生まれの人が多かったため、つけたそうです。

平成二十四年度卒業の二十四回生は、「ひとみ会」二十四の瞳からつけ、二ヶ月に一度食事会をしています。

毎年三月には、卒業生のOBの親睦会が行われています。一年間ハーモニカの練習をして発表したり、芸達者な人のいる学年では「買一お宮」の芝居をして、大喝采だったようです。どの学年も負けず劣らずいろいろ工夫して発表しているようです。

また、二十二年度までは、スポーツ交流会が行われていました。

他の学年との旅行、食事会など都合がつかなくなったりで、合同での行動は、あまり行われていないようですが、少人数だったり、班長さんが知り合いだったり、二、三学年で旅行をしている学年もあります。

(三) 地域とのつながり

地域の趣味の会やボランティア活動で、グループを支えている方々の多くは海鳴学園の卒業生です。先ほど「俳句」の講座のことがでしたが、インタビューによると受講生が



励み合い、笑い合い 卒業が目の前に近づいてきた時、「卒業した後も時々、会えればいいね」という話がでて、家庭、健康面において事情が許される人たちが会を作り、月一回ないし二回、日時を決め集まるようになりました。

現在でも、八十%以上の人が出席するそうです。集まった時には、「何をやるのですか?」と尋ねると、「中身の濃い雑談だよ」と返事が返ってきました。旅行にも行き、親睦を深めたり、カラオケの好きな人たちや踊りの好きな人たちがそれぞれに楽しんだりしていました。お話を聞いていても皆さん非常に前向きな考えを持っている人たちが多く、生涯大学設立の目的でもある高齢化社会における充実した老後の生活を実現するため、仲間作りや教養を身につけ、生きがいを持ちながら、ひとりひとりが実践し、情熱を燃やしています。

(四) 小中学校とのつながり

去年の卒業生 Tさんの声を紹介します。

「家庭科実習でのミシンボランティアが我が第二の人生の宝物です。五年生はナップサック、六年生はエプロン作りと電動ミシン操作を教えています。完成した時の喜び、子どもたちの目の輝きを忘れることができません」と学校訪問をきっかけに一層、子どもたちへの関心を持ちました。

また、Mさんも中学校の子どもたちと着付教室で交流を続けています。

祭りの時には、自分たちで着付けができたと言っています。

一方、卒業生がたずさわっているグループ「七色クレヨン」が創った紙芝居は、ふるさと研究の資料を参考に作り、小学校で発

地域の秋祭りのボンボりに投句されたり、お孫さんたちの入学の節目や祝い事に俳句を作り楽しんでおられるそうです。

この七月には新居の音楽グループが表郷津の高齢者の集まりに向いて演奏し、そのメンバーのリーダーさんはやはりOBでした。

また、毎年、クラブで作った作品を文化祭にも出品されています。

先輩から老人クラブに入ること勧められたKさんは、その人脈を活かして、その後も地域で活動を続けています。

このように海鳴学園で第二の人生の過ごし方や楽しみ方を学んだからこそ、卒業後も続けて、地域の方々とつながっているのだと思います。

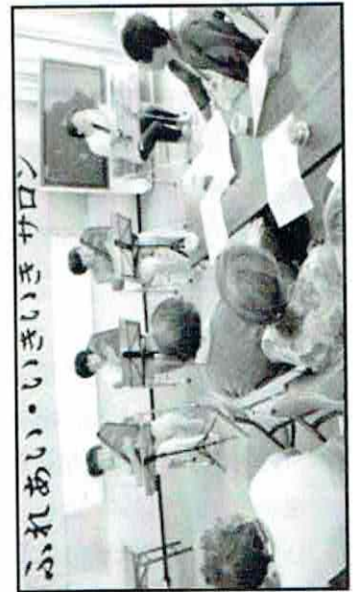
(五) その他のつながり

六月中旬からインタビューをしました。

それぞれの会の集まりの日を調べ、約二時間 アンケート形式で伺いました。

みなさん、笑顔で、楽しく、うなづき、おしゃべりしてくれました。それを3つにまとめました。

ア. この仲間でききやいや



どの会の先輩も少ない男性を中心に「やっぱりこの仲間だからずっと続けている」

「何をおいても会の集まりには行く」とカレンダーに予定を書き込み「絶対休まんよ」でした。ガーデンパークやアメニティで、トレーニング・水中ウォークと体力づくりをしたり、講座の中で覚えた「指もみ」をして、健康を維持していました。健康が第一。でも



一番は「ふるさと研究」で苦勞して絆が深まったことで、「この仲間が一番いい」とつながっています。

イ. 老人福祉センター、アメニティで自分再発見

センター利用が四十七団体ありました。いろいろなカルチャーがあります。その発起人、そして会員はほとんどが海鳴学園卒業生でした。活躍しています。今は、新居の方の利用・活用が多いですが、各地域から老人センターやアメニティを活用して自分を再発見していくともつといいですね。卒業後は、施設を活用しない手はないです。

ウ. つながりました

平成二十四年度の研究「風の宮伝説」を表巻津の高齢者の集まりで鑑賞して、好評を得ました。

これは、海鳴学園の「ふるさと研究」がDVDという手段で、地域に知っていただけた初めての例です。海鳴学園のことを湖西市全体へ広めていくとつながっていくと思います。

が深まります。調べ上げた資料は、海鳴学園ならではのものです。

エ. クラブ活動の見直し

老後、よき趣味としてグループや地域で生き生きと活動できるきっかけになります。三学年合同で、あるいは、ひとつのものをじっくり何回か受講できると嬉しいです。

○ 発展について

今まで、新居町が中心でしたが、これからは湖西市全体のふるさとがみえてくることを期待します。そのためには、

ア. 広く市民に海鳴学園を知ってもらおう。

広報などでPR、募集チラシに、受講生の声を載せたらどうでしょうか。

イ. ふるさと研究の資料を提供する。

ふるさと研究は、先輩の方々の貴重な業績、宝物です。紀要の中に眠らせず、気軽に利用し、地域のふれあい、活性化に活かしてください。

六十一件の資料は、閲覧できるように老人福祉センターにおいてあります。

ウ. 卒業生や受講生の持っている力を活用してください。

幼稚園、保育園、学校や地域とのつながりの中で子どもたちを応援し、文化や歴史を伝え、見守っていくことが、私たちが地域に還元できる方法のひとつと思っています。

ロ まとめ

先輩の方々の足跡をたどっていくと、よき講師陣が揃い、自分たち一人ひとりが講義を理解し、難しいところはみんな学習し、

先輩たちは「元気」「食欲でいいかげん」「いさじかがげん」で頑張って、卒業後、それぞれに皆さんでつなげていました。

五. これからの巻

ロ 提言・課題

海鳴学園の二十五年間の足跡、貴重な「ふるさと研究」「卒業後の活動」から多くの「ふるさと」が見えてきました。

県下初の「老人大学」としてスタートし、シニアの方々が学ぶ意欲を持ち、大学を待望していました。

卒業生の方々の多くは、八十代、なかには九十代の方も自立し、輝いています。

私たちは、次のことを提言いたします。

海鳴学園の存続、充実、発展をお願いします。

○ 存続について

今後、ますます高齢化が進む社会にあつて、学ぶ意欲をもち、自立し、いきいきと協働で地域を明るくしていこうとするシニア世代のために、今後も海鳴学園の存続をお願いします。

○ 充実について

ア. 公開講座の開催

公開することで一般市民も享受でき、海鳴学園を知ってもらうことができます。卒業生も参加できれば嬉しいです。

イ. 講座内容の見直し

受講生の意見、関心の深い講座も取り入れてください。

ウ. ふるさと研究の継続

学んだことを深め、皆で研究する醍醐味、達成感や温かい絆

助け合いながら進む姿は尊く美しい。

ふるさと研究では多くのことから手掛け、現場に足を運び、研究し、多大な成果を収め、達成した級友の喜びは太い絆になっているようです。

海鳴学園では年齢差のある学友で、それぞれに異なった経験をもち、中身の濃い雑談のなかに何気ない友情が育まれてゆく。これを忘年の友と言うそうです。私たちの何つた話のなかで、自分たちの仲間が一番よいと、皆が口をそろえて言っています。同じ釜の飯を食べた者同志、何でも話せる友達です。

私たちのテーマは決まりましたが、卒業生みんなが知っていることなので、どのようにまとめたら良いか困りました。

班を中心に経験の深い人がリーダーとなり、文章、写真、映像機器への取組、行き詰った時には全員に意見を聴き、進めてきました。最善を尽くして発表できたことを感謝いたします。

文集「海鳴」をのぞいてみますと先輩たちの遺した言葉が心に沁み入ります。

「良い師を得るよりも、良い友を持つ」という生涯大学の本質は何かと問われたら、「ふれあい」「学びあい」「はげみあい」「笑いあい」とけあいの場」それが生涯大学です。当節「鉄は熱いうちに打て」のみならず「ダイヤモンドはゆつくり磨け」が生涯学習の合言葉だそうです。内に秘めた素材を大切に磨いて 輝いていきたいと思ひます。

講師の方々をはじめ事務局、老人福祉センターの職員の方々の惜しみないご協力を感謝申し上げます。ありがとうございました。

苦勞し、発表までこぎつけることができたこの仲間を心の宝とし、よき先輩たちの導きを守り、同級生一同これからは協働という理念のもと、域のために頑張つて支えあつていきたいと思ひます。